

(資料)

REFRANERO ESPAÑOL (31)

スペインの諺辞典

Bernardo Villasan^{*}(ed.)

新井 藍 子^{**}

O

1196. O ayunar, o comer trucha.

絶食するか 鱒を食べるか どちらかだ

- 人並みの生活に満足しない者をいう。鱒は上等な魚としてよく知られている。(コバルビアス, 宝典) 全部欲しいかそれとも何にも欲しくないか, どちらかだけを欲する場合に用いられる。
- 極端なことを好む者を, ごちそうを食べるか, それとも何にも食べないかにたとえた諺。

1197. Obra (La) alaba el maestro.

作品が マエストロを 賞賛する

- 何事によらず, 人というものは仕事とか作品の上手, 下手により評価されるということ。
- スバルビィ諺辞典には異表現で “La obra es la que alaba el maestro. マエストロを賞賛するのは, その作品である” がある。スバルビィは “立派に出来上がった作品

^{*} Edición y revisión. Facultad de Humanidades. Universidad de Fukuoka.

^{**} Profesora de español en la Universidad de Fukuoka (Facultad de Humanidades).

が、それを創った者に名誉を与えるのである”とコメントしている。

- 人は出来上がった作品、業績により評価されるものであるから、どのように仕事を遂行していくべきかをおしえてくれる諺である。日本にも、どんな事でも、その道の修行には大変な努力が必要であるとおしえてくれる諺が次ぎのようにある。；“首振り三年ころ八年”（尺八の修行年数を言う），“櫓三年に棹八年”（櫓と棹を操るのにかかる年数）など。

1198. Obra hecha, dinero espera.

完成した仕事に 金が待っている

- 仕事をすれば、金が得られるのは確実である。また、仕事をした者は、それに対する支払いが遅れるのを好まないという意。（スバルビィ）
- スバルビィ諺辞典には異表現で“Obra hecha, dinero, o venta espera. 完成した仕事に、金或は、販売が待っている”が、また、バロス諺集には“Obra acabada, venta aguarda. 同訳”がそれぞれある。
- 日本の諺“稼ぐに追い付く貧乏なし”，“鍬を担げた乞食は来ない”，“稼げば身立つ”，“精出せば凍る間もなし水車”などが言うように、人は仕事をしてさえいけばいくばくかの金が入ってくるし、食べていける。反対に働かないで遊んで暮らしていれば、山のように財産があってもいつかは尽きてしまう。“座して食らえば山も空し”，“遊んで食らえば山も尽きる”などの諺がそうおしえてくれる。

1199. Obras (Las) hacen linaje.

業績が 家柄を作る

- 人々が行った事業によって、それに相応しい名声が得られ、代々それを子孫が受け継いでいくということ。（スバルビィ）
- 良い家柄に生まれた子孫は、過去における先祖に負うということであろう。たとえば、スペインの Isabel 女王の援助を得て、1492 年に Guanahaní (San Salvador と命名) に到着し、その後も 3 回にわたりスペインから出帆、中米からベネズエラの海岸部を航海したコロンブス (Cristóbal Colón) は、代々の子孫のために海洋の提督、発見された大陸の副王、総督などの称号、それらの植民地から得られる利益の十パーセントなどを願いでた。

- 例題：セレスティーナ第9幕，良家の子女であるメリベアに嫉妬している娼婦のアレウサが言う，“...<Las obras hacen linaje, que al fin todos somos hijos de Adán y Eva.>....., y no vaya a buscar en la nobleza de sus pasados la virtud. どういう行いをするかによって，家柄が決まるんだよ。.....ご先祖さまが貴族だったことに値打ちがあるみたいに，思わなきゃいいのよ。”(魔女セレスティナ，大島正訳)
- 名門貴族の家柄を尊ぶヨーロッパとは違い，日本では“家柄より芋茎^{いもがら}”（家柄は食えぬが芋茎《里芋の茎》は食べられるだけ値打ちがある），“芋茎は食えるが家柄は食えぬ”，“家柄より食い柄”などと言って家柄を自慢する者を揶揄している。

1200. Las obras que se hacen declaran la voluntad que tiene el que las hace.

行いにより 人の考えがわかる

- 行動により，その人の気持ちを知ることができる。(スバルビィ)
- 例題：ドン・キホーテ第二部 62 章，ドン・キホーテの招待主である富裕な騎士の邸宅で，青銅の魔法の首が，ひとりの夫人の質問に答えた。それに対し夫人がこう言う，“... , las obras que se hacen declaran la voluntad que tiene el que las hace. ... 人の行いは，その人の考えがそのまま表れるだけですもの”(統編三，高橋正武訳)
- 人が心に思っていることや，考えていることは，自然にその人の言動に表れるものであるということ。また，品性，教養なども人の言葉，ふるまいなどにおのずと滲みでてくるものである。日本には“言葉は心の使い”，“言葉は身の文^{あて}”などという諺がある。心に思っていることは，おのずとことばに表れるという意である。とかく他人の行いの良い悪いはすぐにわかるが，自分のそれには気づかないことが多い。“人の振り見て我が振り直せ”という諺は，そういう他人の行動を見て，自分の振る舞いを反省し，直すべきところは改めよとおしえている。

1201. Obras son amores, que no buenas razones.

愛は 上手な言葉の中ではなく 行いの中にある

- 人の価値というものは，言葉によってではなく，行いによって分かるものである。(パロス) 人に愛の気持ちを伝える一番良いやり方は，行いによってである。(スバル

ビィ)

- コレアス諺集には異表現で “Obras son amores, hermano Polo; obras son amores, que no amor solo. 兄弟よ、行いが愛である、行いを欠く愛は、愛ではない” がある、また、類義では “Obras hablen, palabras callen. 行いが話しなさい、言葉は黙りなさい”, “Obra y habla poco. 行いなさい、そしてあまり話さないようにしなさい” などがある。
- 新約聖書、ヤコブの手紙 <Hechos y no palabras, 行いを欠く信仰は死んだもの> では、どんなに行いが大切であるかをこう説いている；<わたしの兄弟たち、自分は信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか。(2-14) 行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。(2-17) 神がわたしたちの父アブラハムを義とされたのは、息子のイサクを祭壇の上に^{ささ}げるといいう行いによってではなかったですか。(2-21) これであなたがたも分かるように、人は行いによって義とされるのであって、信仰だけによるものではありません。(2-24)>
- “言うは易く行は難し” は、口で言うだけではなく、それを行うことがどんなに難しいかを教えてくれる。また、口先だけで、行動が伴わない者を “理屈上手の行い下手”, “口叩きの手足らず”, “口は口手は手” などというし、口だけは達者だが、仕事は満足にできない者を “口自慢の仕事下手”, “口上手の商い下手” などという。

1202. Obreros a no ver, dineros a perder.

鬼の居ぬところでは 金も逃げる

- 支払う金に見合う働きをしてもらうためには、雇った者をきちんと見張る必要がある。(パロス) 雇い主が現場にいないと、無駄に金が出費されるのが常である。(スバルビィ)
- 主人や監督する者がいないと、使用人は働かないということ。そういう状況をユーモアをこめて巧みな表現でたとえたのが、日本のことわざ “鬼の居ぬ間に洗濯” (<洗濯>は、日頃の苦労を忘れてのびのびと気晴らしすること。—故事, ことわざ活用辞典), “鬼の留守に洗濯”, “鬼の留守に豆を炒る” などだろう。見出しのスペインの諺の方は、ことわざ特有のたとえを用いることなしに、ただそのまま “使用人が見えなければ、金が無駄になる” と謳っているだけである。しかし, “obreros—dineros, ver—perder” とそれぞれ韻を踏ませ、スペイン語の表現には工夫が見られる。

- 類義の諺には “El ojo del amo engorda el caballo” (筆者の諺辞典, 諺 1213 を参照) がある。

1203. Ocasión (La), asirla por el guedejón.

好機の前髪をつかまえよ

- 良い機会が訪れたら、逃がすべきではない。(パロス)
- 次のようないろいろな異表現と故事があるが、まずコレアス諺集から見てみよう；
“La ocasión asilla por el copete o gudejón. 好機の前髪を捕まえよ” コレアスによると、昔から、“機会—チャンス” の足には翼があり、頭には前髪だけが生えていて、後頭部はつつるして髪が一本もなく、しかも車輪に乗っていたと信じられていた。だから“機会”が目の前に現れたら直ちに前髪を捕まえないと、通り過ぎて行ってしまい、もう二度と捕まえることができないのである。注：copete も guedejón も前髪—筆者。
- スバルビィ諺辞典には、“Asir la ocasión por la gudeja, o por la melena, o por los cabellos, o por el copete. 髪の毛、或は、前髪をつかんで幸運を捕まえよ”が収載されている。貪欲に好機に乗ぜよの意、としている。
- コバルビアスの宝典によると、“ocasión—好機、幸運”は、薄衣をまとった女神で踵かかとに翼があり、しかも非常に早く走る車輪の上に爪先立っていて、前髪が顔の上にかかっているが後頭部には何も無い。これはアテネ生まれのすぐれた彫刻家 (Phydias) が彫った幸運の女神像である。
- イリパレンの“格言の背景”には、“La ocasión la pintan calva. 幸運の女神はハゲに描かれている”が収載。説明によると、これはかなり古い格言でローマに“好機”という女神がいた。非常に美しい女神で素っ裸で爪先立ちで車輪に乗っており、肩か足に翼が生えている。これは“好機”は素早く過ぎ去ることを示している。また、この女神はふさふさした前髪を額に垂らしていたが、後ろの方には全く髪がなかった。故に、通り過ぎてしまったら“好機”の髪を捕まえることは不可能であるが、前方から待ち受けていれば容易に捕まえられる。ここから“coger la ocasión por los cabellos (髪の毛をつかんで) 幸運をつかむ”という熟語がきている。現在は熟語として“coger la ocasión por los pelos”と言う。“Por los pelos—間一髪で、かろうじて”機会が去ってしまいそうになった最後の瞬間に幸運をつかまえることを意味す

る。注：辞書によっては、同義で “agarrar la ocasión por los cabellos” とも出ている一筆者。

- 例題：ドン・キホーテ第一部 25 章，ラ・シエラ・モレーナ山中でドン・キホーテが遍歴の騎士のひとりであるアマディース・デ・ガウラをまねして苦行をしたいとサンチョに言う，何故なら “..., no hay para qué se deje pasar la ocasión, que ahora con tanta comodidad me ofrece sus guedejas. ... 今あたかもよくわしに前髪を向けとる<機会>のやつを，取りにがしてはならぬのじゃ。”（正編二，永田寛定訳）注：“guedejas-su cabellera-（機会）髪の毛，これは，<a la Ocasión la pintan calva y hay que agarrarle el único mechón o copete que tiene. 機会は，後ろはハゲで前髪しかないからそれをつかまえなければならぬ>という故事からきている— Martín de Riquer de la Real Academia, Volumen I, Don Quijote de la Mancha.”
- 同義の日本の諺には“好機逸すべからず”，“鉄は熱いうちに打て”，“思い立ったが吉日”，“善は急げ” などがある。いずれも事を成すには，好機をつかむことが大切であるという意である。スペインの諺のほうは，古い故事からきていてとても面白い。

1204. Ocasión (La) hace al ladrón.

機会は ^{ぬすつと} 盗人を生む

- たいていの場合，悪いことをしようと思ってするのではなく，機会がそういう状況がわれわれにもたらすのである。（バロス）
- 同義の諺には “En arca abierta, el justo peca. 開いている金庫の前では，正直者でも罪を犯す”（筆者の諺辞典，諺 518 を参照）がある。

1205. Ocasión y naipes, a todos hacen iguales.

機会とトランプは 誰をも等しくする

- 人は誰でも同じような状況に直面すると，同じような振る舞いをするものである，また，人を興奮させ，黒，白のはっきりした賭け事も人がそれぞれ持っている本性を等しくする。（バロス）
- 同義の諺には “Juegos, pendencias y amores, igualan a los hombres. 賭けごと，喧嘩，色恋は人をみな等しくする”（筆者の諺辞典，諺 715 を参照）がある。賭けごと，喧嘩，恋は，誰からも思慮とプライドを奪うし，チャンスもまた，先の（諺

1204) 諺が言うように普通の人を盗人ぬすつとにするかとおもえば、“時に遇えば鼠も虎になる”，“時至ればみみず蚯蚓も竜となる”などの諺がたとえているように、才能がない凡人でも時流に乗って機会をうまく捕まえれば地位を得て権勢を振るうようにもなる。

1206. Ociosidad (La) es madre de todos los vicios.

無為は あらゆる悪徳の もとである

- 何にもすることのない人は、暇つぶしによくないことを想像したり、実際にやらかしてしまうということ。(バロス)
- スバルビィ諺辞典には異表現で“La ociosidad es madre de la mala ventura. 無為は悪運のもとである”(何にもしないしていると、しばしば災難を引き起こすようになる—スバルビィ)がある。
- 同義の諺には“Cuando el diablo no tiene qué hacer, con el rabo mata moscas. 悪魔は、暇でしょうがないと、しっぽでハエを殺す(小人閑居して不善をなす)”(筆者の諺辞典、諺 334 を参照)，“Cuando el diablo no tiene qué hacer, con el rabo caza moscas, o abre el culo y papa moscas, o coge la escoba y se pone a barrer, o en algo se ha de entretener. 悪魔は暇でしょうがないと、しっぽでハエを捕る／尻を開けて、ハエを飲み込む／ほうきをとって掃除をはじめ／なんでもいいから気晴らしするにちがいない”(暇つぶしのために年齢とか、その時の状況におかまいなく不釣り合いなことをしてかす人をいう—スバルビィ諺辞典)などがある。
- 日本のことわざ“小人閑居して不善をなす”，“暇ほど毒なものはない”，“楽が身に余る”などが、ぴったり同じ意味で、人というものは安楽過ぎると、とかくよくないことや、ばかなことをしてかしたりして駄目になってしまうということ。

1207. Ocho de invierno y cuatro de infierno.

八ヶ月の冬 四ヶ月の地獄

- コレアス諺集によると、旧カスティーリャ地方の長い冬と、その地方の平野部、サラマンカー一带の夏の暑さを言う。まさに、“Cuatro de invierno y ocho de infierno. 四ヶ月の冬、八ヶ月の夏”と言われている新カスティーリャ地方の気候とは真反対である。この地方における夏はとても暑く感じられる。それにもかかわらず、こう言う人もいる、“El invierno en Burgos, y el verano en Sevilla. 冬はブルゴス(がとて

も寒く)、夏はセビーリャ(がとても暑い)”注: Burgos—ブルゴスは、カスティーリャ地方(スペイン中北部)にあり、9世紀末から200年近く León-Catilla 王国の首都であった。また、Sevilla-セビーリャは、スペイン南部、Andalucía 地方の県都である。Andalucía 地方の Sevilla, Granada (Alhambra-アルハンブラ宮殿がある都)は、とても美しい都市で、こういう諺がある; “Quien no ha visto Sevilla no ha visto maravilla. セビーリャを見たことのない人は、この世のすばらしさを見たことがない人だ”, “Quien no ha visto Granada no ha visto nada. グラナダを見たことのない人は、何も見ていない” —筆者

- 同義の諺には “Nueve meses de invierno y tres de infierno. 九ヶ月の冬、三ヶ月の地獄”(カスティーリャ地方の気候の厳しさを言う、筆者の諺辞典、諺 1182 を参照)がある。

1208. O es loco o privado quien llama apresurado.

慌ただしくドアを叩くのは 気違いか よほど親しい人かの
どちらかだ

- 他人の家を訪問する時は、気をつけたほうがいい。
- ここでの “privado” は “非常に親しい人の意”
- 例題: セレスティーナ第 17 幕、玄関の戸を激しく叩く音を聞いて、女の一人が言う、
“¡Qué porradas que dan! Quiero ir abrir, que o es loco o privado. ¿Quién llama?
あら、なんていう叩き方をするんだろう! あたい、開けにいかなくちゃね。気違いか
あわて者かのどちらかだわ。誰なの?” (魔女セレスティーナ、大島正訳)
- “loco-気違い” のでてくるこういう諺もある “O es devoto o es loco quien habla consigo solo. ひとり言を言う者は、信心深いか気違いかのどちらかだ”

1209. Oficio que no sustenta tu vida, dale despedida.

食べていかれぬ仕事など さっさとやめてしまえ

- 生活していけないような給料しか払わない職場に居続けても仕方がない、或は、いくら好きな仕事だからといっても食べていかれないなら、生活できるような仕事を見つけるべきであるということ。
- スバルビィ諺辞典には次ぎのような同義の異表現が収載されている, “Oficio que no

da de comer a su dueño, no vale dos habas. 食べていかれぬ仕事など三文の値打ちもない” コレアス諺集には標題の表現が載っているが、ドン・キホーテ（第二部、1615年）には異表現の方で出ている。こちらの方が年代的には少し古いと思われる。

- 例題：ドン・キホーテ第二部 47 章，とうとう念願叶って島の太守になったサンチョだが，周囲の者の悪ふざけでご馳走を前にしても何にも食べさせてもらえない腹ペコのサンチョは，医師に向かってさんざん悪態をつく，その中の諺，“Y denme de comer, o si no, tómense su gobierno, que oficio que no da de comer a su dueño no vale dos habas. さあ，食うものをよこせ。それとも，太守の役目をとりあげてくれ。役目の者に食いものもだせねえような，そんな役目なんて，そら豆二つほどの値打ちもねえだ”（続編三，高橋正武訳）
- 人は得意の分野が一つでもあればそれで充分に暮らしが立つが，なまじっか器用であれやこれやに手を出し，多くの知識があるものの結局はすべてがものにならず食うにも困るという“器用貧乏”がある，類義には“多芸は無芸”，“多弁能なし”などもある。

1210. Oficios (Los) mudan las costumbres.

仕事が習性を変える

- 多くの場合，それぞれ持っている仕事はその人の第二の天性を形づくるものである。
- 例題：ドン・キホーテ第二部 4 章，得業士のサンソンがサンチョにもし島の太守ともなれば，今までのサンチョとはすっかり変わってしまうだろうと言い，この諺を引用する，“... que los oficios mudan las costumbres, y podría ser que viéndoos gobernador no conociésedes a la madre que os parió. 職業は平生のしきたりを変えるものだよ。だから，あんたも，太守になったら，生んでくれたおっ母さんにまで知らん顔をするかもしれないね”（続編一，永田寛定訳）
- 家柄が悪くても出世すればそれなりの立派な風格が身につくだろうし，その反対に生まれがよくても仕事で失敗して落ちぶればみるかげもなくなる。そうなると両者ともに本来の素性は後でついた習性にとって代わられてしまう。こちらには“習い性となる”，“習慣は第二の天性なり”などの諺がある。

1211. Ofrecer mucho, especie es de negar.

たくさん申しでるのは 一種の拒絶である

- 相手が求めるものよりも多くのことを提供するの、本当は相手の望みを断っているのと同じであるということ。
- 例題：セレスティーナ第6幕、女術のセレスティーナは殿のカリストの望みを叶えてあげるから、その代わりにお礼の品が欲しいとねだる。それに対してカリストは多くのものを提供する、そこでセレスティーナは、“No te alargues más. Que dice que: <Ofrecer mucho al que poco pide es especie de negar>. それ以上のことはして下さいますな。..... 余り願わない人に多く与えることは断るのも同然と言いますもの。”（魔女セレスティナ、大島正訳）
- 類義で日本の諺にはこういうのがある；“思し召しより米の飯”（思いやりの好意をかけてもらうよりも、米の飯をもらうほうがありがたい），“心持ちより搗いた餅”，“心中より饅頭”など、いずれも心をかけてもらうよりいたしたものでなくても役に立つものを望む意。

1212. Oír, ver y callar es la conducta del sabio.

聞いて 見て 黙っているのは 賢者の行いである

- 人をたしなめる時に多く使われる。（コレアス）
- 類義の諺には“Oír, ver y callar, recias cosas son de obrar. 聞いて、見て、黙っているがいい、難しいのは（それらを）実行することである”（人はこれら三つのことに注意を払わなければならぬ、実行するのはとても大変であるから—スバルビィ），“Oír, y ver, y callar, hace buen hombre y buena mujer. 聞いて、見て、黙っていれば、善男、善女になれる”，“Oír, y ver, y callar, y preguntado, decir verdad con libertad. 聞いて、見て、黙っているがいい、もし訊かれたら、自由に本当の事を言う方がいい”（いずれもコレアス諺集に収載）
- 人というものは、知らなければ心を平安にいられたのに、一度聞いたり、見たりしたために疑心暗鬼が生じ、非常に苦しんだり、悩んだりするようになる。そしてそれを口に出さずにはいられなくなり、相手をなじったり、ののしったりして大変な結果を招くようにまでなる場合が多々ある。自分に関する何か重大な事を知った後で、

それを一人でじっと胸の内にはしまっておくのは至難の技であろう。類義の日本のことわざには“聞けば気の毒見れば目の毒”，“聞けば聞き腹”，“見るは目の毒”などがある，いずれも一度聞いたために心に迷いや悩みが起り，見たために欲に悩まされる結果になることをいう。(故事ことわざ活用辞典)

1213. Ojo (El) del amo engorda el caballo.

飼い主^{まなこ}の眼が 馬を太らせる

- 農園などの所有物，財産などを注意深く管理することが己の利益につながるのである。(パロス) 上司がその場に居ることが部下に一生懸命仕事をさせることになるのである。(スバルビィ)
- 同義の諺には，“El mejor pienso del caballo es el ojo de su amo; y con la cebada que le sobra fregarle la cola. 馬の最良の餌は，飼い主^{まなこ}の眼である，そして，余った大麦でしっぽをきれいにしてあげなさい”(主人の細心の注意に加えて，餌は余るぐらいにたっぷりとあげるのがいい—パロス)，“El ojo del amo, estiércol para la heredad; o el pie del amo; o del señor. 主人の眼/或は，主人の足は，農地への肥料である”(コレアス諺集，筆者の諺辞典，諺 1313 を参照)，“El ojo del señor es el pienso mejor. 飼い主の眼は，最良の飼料である”(同諺集)などがある。
- 類義の諺には“Guarda prado y hartarás ganado. 牧場を守れば，家畜でいっぱい”(筆者の諺辞典，諺 627 を参照して下さい)がある。
- イリバレンの“格言の由来”によると，標題の諺は相当古く，ギリシア時代にまでさかのぼる；プルタルコス (Plutarco, ギリシアの哲学者であり伝記作者で，“対比列伝”の著作者)は，彼の書物“どのように子供たちに栄養を与えるべきか”の中ですでにこの格言を引用している。プルタルコスは，この格言は，何が一番馬を太らせるのかと訊かれた馬の飼育係りが答えたものとしているが，すでにアリストテレスは，“経済学”の中で傑出した二人の人物の警句であると述べている。一人は，何が一番馬を太らせるのかと訊かれて“el ojo del amo- 主人の眼”であると答えた Persa であり，もう一人は，農園に一番良い肥料は何であるかと訊かれて“las huellas del dueño-主人の足跡”であると答えた Afro であるとしている。後のローマ時代には，プリニウス (Plinio) が彼の著作“博物誌”の中で“昔の人々は主人の眼ほど土地を肥えさせるものはないと言っている”と述べているように，ローマ人たちは先の警句

に少々風味を加えたのである。

1214. Ojos que no ven, corazón que no siente.

目が見なければ 心は感じぬ

- 遠くで起こっている気の毒な事は、すぐ傍で見ているよりもずっと感じ方が少ない。
(スバルビィ)
- コレアス諺集には次ぎのような異表現がいくつかある；“Ojos que no ven, corazón no desea; o corazón que no desea. 目から遠ければ、心から遠い”，“Lo que los ojos no ven, el corazón no lo desea. 同訳”（筆者の諺辞典，諺 765 を参照して下さい），“Ojos que no ven, corazón que no duele, que no quiebra o no llora. 目が見なければ、心は痛まぬ／心は悩まぬ／心は泣かぬ”，“Ojos que tal ven y oídos que tal oyen. 見れば目の毒，聞けば気の毒”（遺憾な事柄や不名誉な事，恐ろしい事や脅迫などを指す，時には冗談として言うーコレアス）。
- コバルピアスの“宝典”によると，この格言“Ojos que no veen, corazón no quebrantan. 目がみなければ，心は悩まぬ”は，ホラティウス（Horacio 前 65—前 8，古代ローマの桂冠詩人）の詩中の言葉だそうである。それが後に格言として流布されたのであろうか。
- 例題：ドン・キホーテ第二部 67 章，銀月の騎士に敗れ，故郷で隠棲して牧人として生きようと言うドン・キホーテにサンチョはよろこんで賛成するが，牧場に弁当をもってきてくれる娘のサンチーカを見る羊飼いの連中が手を出すのではないかと早々とそこまで心配する，“...y ojos que no veen, corazón que no quiebra; 目にうつらなきや胸にも響かねえし，...”（続編三，高橋正武訳）
- 類義の日本の諺は次ぎのようにいくつかある；“見ぬが仏”，“聞かぬが仏”，“見ぬが極楽”，“知らぬが仏”など，いずれも見たり聞いたりして事実を知れば，心配したり，腹が立ったりと心を悩ますが，知らなければ仏のように穏やかな気持ちでいられると言っている。

1215. Olivo y aceituna todo es uno.

どんぐり せいくら
団栗の背競べ

- 本質的にどれも似たり寄ったりで，同じようなものなのにやっきになって違うところ

を見つけようと時間を無駄にする人たちを言う。(スバルビ)

- 標題の諺の直訳は“オリーボ (オリーブの木) と呼ぼうがアセイテユナ (オリーブの実) と呼ぼうが同じである”(同じものを異なった名前とか異なった言葉で繰り返す人を指して言う—スバルビ諺辞典)
- 類義の諺には“Entre ruin ganado, poco hay que escoger. 惨めな家畜の中からは、ほとんど選びようがない(五十歩百歩く)”(筆者の諺辞典, 諺 564 を参照して下さい)がある。
- 日本の類義の諺には標題の訳以外にも“五十歩百歩”, “一寸法師の背競べ”などがある。

1216. Olla que mucho hierve, sazón pierde.

煮立ち過ぎたナベ料理は 味が不味くなる

- 物事をあまりにも長引かせると、しまいには興味を失ってしまうことをたとえて言う。(バロス)
- コレアス諺集には異表現で“Olla que mucho hierve, sazón pierde; o sabor pierde. 同訳”が収載されている。(弱火で煮込まなければならぬ—コレアス)
- Olla (ナベ, ナベ料理) についての諺がいくつか次ぎのようにある; “La olla en el sonar, y el hombre en el hablar. ナベは音で, 人は話し方で”(役に立つか立たないかが分かる—バロス), “Olla que no has de comer, déjala cocer. まだ食べられないナベ料理は, そのまま煮立たせよ。”(直接関係のない事柄には口を出すべきではないの意で, 同義の諺には“Agua que no has de beber, déjala correr. 飲めない水は, 流れるままにせよ”がある—バロス), “La olla sin cebolla, es boda sin temboril. 玉ネギの入っていないナベ料理は, 太鼓のない結婚式と同じ”(それらはスパイスの役目をして味とか楽しさを引き立たせる—筆者), “Olla sin sal, al gato se puede dar. 塩の入っていないナベ料理は, 猫に上げてしまへ”, “La olla sin verdura, no tiene gracia ni hartura. 野菜の入っていないナベ料理は, 楽しくもないし, 満腹もしない”, “La olla y la mujer, reposadas han de ser. ナベ料理はゆっくりと, 女はゆったりと”

1217. Oración (La) breve penetra en los cielos.

短い祈りの言葉が 天に入る

- 祈りの言葉、願いごとは効き目のある、短いものがよい。(パロス)
- コレアス諺集には次のように異表現がいくつかある；“La oración breve, a menudo y devota. 祈りは短く、たびたび信心深く唄えよ”，“La oración breve sube a los cielos. 短い祈りの言葉が天まで届く”，“La oración devota, breve y a menudo, penetra en los cielos. 信心深い、短い祈りの言葉をたびたび唱えれば、天に入る”，“Oración de perro no va al cielo. べてん師の祈りは天に届かない”，“Oraciones quebrantan pronósticos. 祈りの言葉は、予言をうち負かず”（神への祈りの言葉は、占星術師や占い師が言ったことを覆し、罰を良いことに変えてくれる—コレアス）
- スペインの教会、大聖堂などでは祭壇の前で跪き長々とお祈りをしている老女たちを見かけるが、一連の上記の諺は本当の信仰心をもってお祈りすれば短くてよいと提唱している。ついでにいうと、祈りと願いごとは違う。“祈りは、願いごとではありません”と述べたのはマザー・テレサである。神にお願いするのは、自分が困った時、悲しい時、或は辛い時などで、日頃神様にお祈りしたり、拝んだりしたことの無い者が、神に助けを求めているのである。日本の諺には、そういう身勝手なお祈りを表現しているものがたくさんある；“苦しい時の神頼み”，“切ない時の神叩き”，“悲しい時の神祈り”，“人窮すれば天を呼ぶ”，“今際の念仏誰も唱える”，“叶わぬ時の神頼み”など、どういう時に日本人は、神仏に拝んでいるのかが分かって面白い一連の諺である。では、人はどんな時に祈りたいのであろうか。“祈りの言葉”（幻冬舎、2003, 8, 30）という本を書いた青山圭秀氏によると、“祈りたいと思ったとき、われわれは心のなかで、すでにあの崇高な何かの存在を感じている。……その存在にもっと近づきたいという気持ちを起こさせる。だからこそ、われわれは祈りたいと感じるのだ。その渴望が、すでに祈りである。言葉にしなくても、祈りたいと感じたとき、人はすでに祈っている。”